

## 保健体育教師を目指す大学生のバレーボールに関する調査 —学習者の重点課題の特定を目指して—

柿木 亮<sup>1)</sup> ・ 長登 健<sup>2)</sup>

### 【要旨】

本研究・調査報告は、保健体育教師を目指す大学生のバレーボールについての意識、技術の習得度、理解度および指導性の実態を調査し、学習者の重点課題を明らかにすることを目的とした。対象者は、2018年J大学経営情報学部で開講されたバレーボール講義の履修者18名であった。全ての対象者は、保健体育の教職課程に在籍しており、これまでの学校教育でバレーボールの授業を受けた経験があった。バレーボールについての意識、技術の習得度、理解度および指導性について質問紙の5段階尺度によって調査した。ほとんど全ての対象者がバレーボールというスポーツを楽しんでいることに加えて、バレーボールを教えることについても楽しみであると回答する者が多かった。バレーボールの技術の習得度は、オーバーハンドパスやアンダーハンドパスの項目が高く、これまでの学校教育での学習効果が現れていると考えられる。一方、「作戦を立てる」の習得度および理解度が低値を示したことから、フォーメーションやローテーションなどを含めた作戦を立てることができる力を養うことが重点的な課題として明らかとなった。また、技術の理解度や指導性の尺度は全体的に低かったことから、この点を講義内で改善していくことが指導力向上のために必要であると考えられた。

### 1 はじめに

バレーボールは、中学校学習指導要領（文部科学省、2017）の球技領域において「ネット型」として分類されており、1回の触球で相手コートに攻撃するバドミントンや卓球、テニスなどの攻守一体型に対して、自チーム内で3回以内の触球で効果的に守備から攻撃ができるようにするため連携プレイ型に分類されている（高橋、1994年）。バレーボールは、比較的多いクラスでもゲームが実施できることや、仲間と連携する協力的な場面が必須であることから体育授業で教材として多く用いられている（伊藤ら、2002年）。また、バレーボールは、個人やチームの能力に応じた作戦を立て、集団対集団で勝敗を競い合うこと

<sup>1)</sup> 順天堂大学医学部生理学第二講座

<sup>2)</sup> 順天堂大学スポーツ健康科学部

に楽しさや喜びを味わうことのできるスポーツであり、ルールを工夫することで幅広い年代で取り組むことができる。しかし、バレーボールの楽しさを味わうことができるようになるためには、基礎的な技術が必要であり、それを習得できるまでには個人差はあるがかなりの時間を要する。したがって、保健体育教師はバレーボールの基礎的な技能を向上させるためのポイントを理解し、生徒のつまずきに対しても適切に指導できる能力を身につけていることが必要である。多くの教職課程を持つ大学では、指導力向上のために専門バレーボールの講義が開講されているが、大学の教職課程にある学生がこれまでの学校教育によってバレーボール技術の習得度、理解度および指導性をどの程度備えているかについて把握しておくことは、体育教師を目指す学習者に対するより良い学びを提供するための基礎的資料になると考えられる。そこで、本調査では保健体育教師を志望する受講生を対象に、バレーボールについての意識、技術の習得度、理解度および指導性の実態を調査し、教職課程にある学習者への重点課題について考察することを目的とした。

## 2 方法

### 1) 対象者

J 大学経営情報学部で開講されている「バレーボール」の受講者（3年生）18名を対象とし、全ての対象者が保健体育の教職課程に在籍していた。また、すべての対象者は、高校までのいずれかの学齢において体育授業でバレーボールの経験を有するものであった。過去にバレーボールを専門に行ったことのある経験者は1名であった。

### 2) 調査方法

2018年9月24日における最初の講義で実施した。講義の目標・注意点などのオリエンテーションや、2018年度版6人制ルールブックに記載されている「バレーボール競技の特性」についての確認テストを行った後、バレーボール技術等について簡単な解説を行った。その後、図1の質問紙を配布した。質問項目は、先行研究（稲垣ら、2011）を参考にし、5段階評定尺度で調査を行った。2～5は、学生のバレーボールに対する意識を問う項目である。6～24は、バレーボールの技術の習得度、理解度および指導性の程度を問う項目である。また、別紙の「バレーボールを受講する上での自身の目標を記述しなさい」という設問に対して、自由記述方式で回答を求めた。質問紙の5段階尺度は、それぞれの項目で平均値ならびに標準偏差の算出を行なった。自由形式で得られた内容は、「技術の向上」、「知識の習得」、「指導性の向上」、「授業を楽しむ」、「その他」に分類した。複数回答もあるため、それぞれの分類で、対象者数に対する回答数で割合を算出した。



### 3 結果および考察

#### 1) バレーボールに対する意識

バレーボールに対する意識の結果を図2に示す。バレーボールの面白さについては、つまらないを「1」、面白いを「5」として回答を得たところ、「5」が9人、「4」が5人、「3」が4人であり、多くの者(77.8%)がバレーボールの面白さを感じているようであった。バレーボールは、我が国の学校教育において体育の球技種目として古くから広く行われてきており、学校行事の球技大会でも定番ともいえる種目である。伊東ら(2002)の報告でも、ネット型のうち、中学校及び高等学校で80%以上がバレーボールを履修している。本研究の対象者についても、高等学校までのいずれかの学校教育においてバレーボールを行った経験を有しており、その授業の中で「ラリーが続く時」、「アタックやブロックが得点につながった時」、「難しいボールをレシーブできた時」に面白さ・楽しさを感じていたようであった。また、民放のテレビ放映を通して「世界バレー」や高校生大会の「春高バレー」などを目にするすることで、バレーボールの迫力、連携プレー、チームでボールを落とさずつなぐ、というバレーボールの本来の面白さを実感する機会があることも考えられる。本調査では体育教師を目指す学生を対象にしたという一定の偏りはあるが、バレーボールをスポーツとして肯定的に捉えていると判断できる。

バレーボールを教える不安については、不安を「1」、不安でないを「5」としたところ平均値は $3.17 \pm 1.15$ であった。今回の項目は、中学・高等学校において指導する場合の「授業実践不安」を問う項目であった。指導経験が浅い教員は、指導経験は豊富な教員に比して、授業実践不安は高く、また指導歴や性別によって指導不安の程度が異なっている(西松, 2005)。本調査の対象者は、児童・生徒に対して指導する経験はほとんど有していないことから指導不安が高くなると予想したが、平均値はほぼ3「どちらでもない」という値であった。バレーボールは、中学校・高等学校において履修する生徒が多いため、他の種目よりも多くの授業数をかけてバレーボール技術等を段階的に習得してきていることが考えられる。このような経験を通してしているため、体育教師を目指している本対象者は、ある程度指導の道筋が見えており、指導への不安感もそれ程大きくならなかったのかもしれない。この点、他の種目についても同様の調査を行い、比較・検討することで、指導不安がある種目を明らかにすることができるだろう。一方で、「1」不安であると答えた学生もいたことから、その不安感を取り除くべく、講義の中でバレーボールの技術や理論に関して正確に理解させる工夫が必要であると考えられる。

バレーボールをプレーするのが難しいかについては、難しいを「1」、簡単を「5」としたところ平均値は $2.44 \pm 1.04$ であり、「2」以下が9人(50%)いたことから、半分の学生はバレーボールをプレーするのは難しいと感じていることがわかった。バレーボールにおいて「3回以内の触球でボールを繋いで効果的に相手コートへ返球する」ことがチームとして最も重要

であるが、そのためには「状況に応じてボールをコントロールする」という個人の技能が確実に必要になってくる。そのため、学校教育現場においては、個人技能の習得に多くの時間を充てることや、試合を行う際にはワンバウンド（勝本ら、2002）やワンキャッチ（芳賀、2010）を認めるなどのルールの緩和することによって、生徒の学習を促す工夫が為されている。本講義での事前オリエンテーションにおいて、成年の6人制バレーボール競技のルールに則って技術・知識・指導性を習得することを目的とした講義内容であることを教示したことから、これまで授業で行ってきたバレーボールと比べて難しく感じたことも一つの要因であるかもしれない。

バレーボールを教えるのは楽しみかについては、楽しみでないを「1」、楽しみを「5」としたところ、平均値は $3.50 \pm 0.99$ であり、55.6%の者（「5」が2人、「4」が8人）が楽しみであると答えた。教員を目指す本対象者は、これまでの教職課程の講義において体育授業の計画や実施の方法について学習しており、指導者としての姿勢が育ってきているのかもしれない。バレーボールを教えるのが楽しみか否かに影響を与える要因は、「技術面の不安」、「指導ポイントの不理解」、「指導者としての責任感」などいくつもあると思われる。したがって、講義の中では、技術面の不安を払拭するのはもちろんのこと、技術やルールなどの指導ポイントを理解させていくことが最も重要であると考えられる。

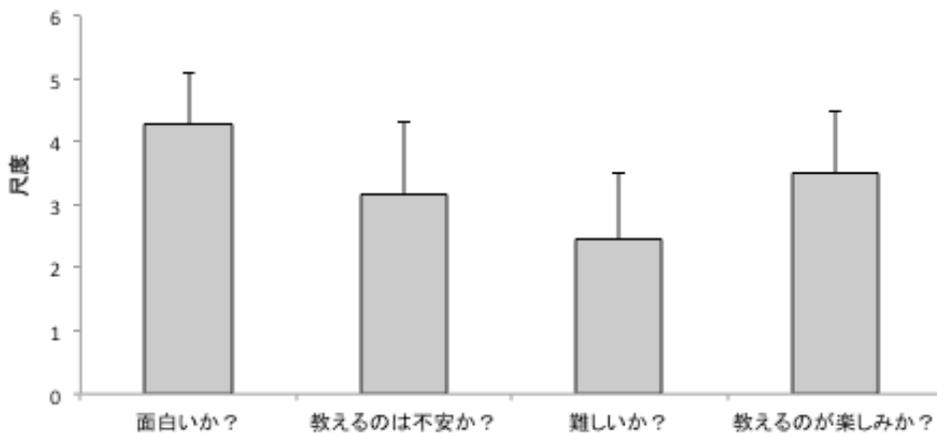


図 2. バレーボールに対する意識

## 2) 技術の習得度

バレーボールに関する技術の習得度は、できないを「1」、できるを「5」としてオーバーハンドパス、アンダーハンドパス、トス、アタック、作戦についてそれぞれ回答を求めた。結果は図3に示す。オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、トス、アタック、作戦の平均値は、それぞれ  $3.50 \pm 0.99$ 、 $3.39 \pm 1.24$ 、 $3.11 \pm 1.13$ 、 $3.00 \pm 1.19$ 、 $2.44 \pm 1.20$  であった。オーバーハンドパスおよびアンダーハンドパスの平均値は、「3」よりも高く、トスおよびアタックに

については「3」付近であった。学校教育において基本技能の習得に多くの時間が割かれていることから、これらの技術において一定の学習効果が得られていたものと考えられる。一方で、「作戦を立てられるか」の項目の尺度は、オーバーハンドパスやアンダーハンドパスに比べて有意に低く ( $p<0.05$ )、「3」を下回っていた。作戦を立てるためには、攻撃・守備のフォーメーションやローテーションごとの各自の役割、また相手コートへの効果的な返球方法などを理解している必要がある。本調査の結果は、学校教育において基本技術の習得のための時間に比べるとチームで作戦を考える学習時間が少ないことを示唆しているかもしれない。

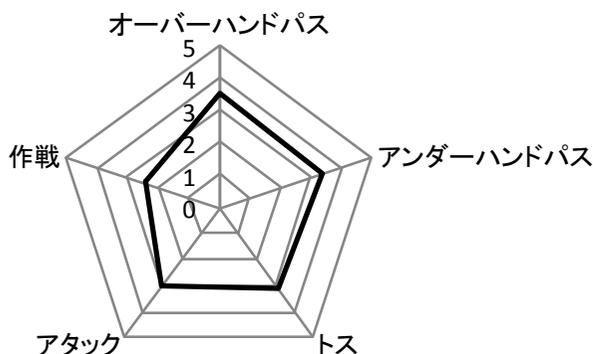


図 3. バレーボールの技術の習得度

### 3) 技術の理解度

バレーボールに関する技術の理解度は、ポイントが分からないを「1」、分かるを「5」としてオーバーハンドパス、アンダーハンドパス、トス、アタック、サーブ、作戦、ルールについてそれぞれ回答を求めた。結果は図 4 に示す。オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、トス、アタック、サーブ、作戦、ルールの平均値は、それぞれ  $2.78\pm 1.22$ 、 $2.94\pm 1.16$ 、 $3.00\pm 0.97$ 、 $2.67\pm 1.08$ 、 $2.89\pm 1.13$ 、 $2.33\pm 1.08$ 、 $3.00\pm 1.08$  であった。「作戦を立てる」の理解度は、統計的な差は見られなかったが、技術の習得度と同様に最も低値を示した。理解度は、全ての項目が技術の習得度よりも低値を示しており、ほとんどが「3」以下であった。技術的ポイントが理解されると、技術の習得だけでなく指導性の獲得につながることを予想されるため、保健体育教師を目指す学生に対しては講義の中で技術の習得以上に技術の理解度を高める必要があると考えられる。

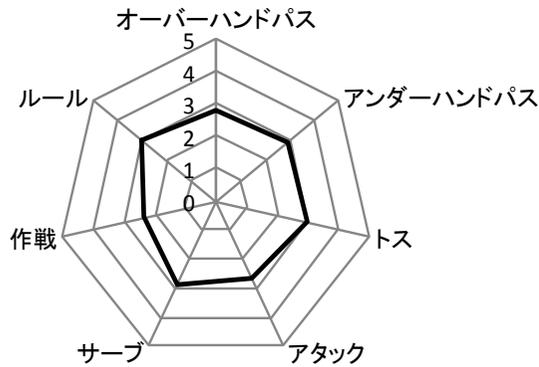


図 4. バレーボールの技術の理解度

#### 4) 技術の指導性

バレーボールに関する技術の指導性は、教えることができないを「1」、できるを「5」としてオーバーハンドパス、アンダーハンドパス、トス、アタック、サーブ、作戦、ルールについてそれぞれ回答を求めた。結果は図 5 に示す。オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、トス、アタック、サーブ、作戦、ルールの平均値は、それぞれ  $2.83 \pm 1.04$ 、 $2.94 \pm 1.11$ 、 $2.39 \pm 0.98$ 、 $2.44 \pm 1.04$ 、 $2.61 \pm 1.04$ 、 $2.33 \pm 1.14$ 、 $2.61 \pm 1.20$  であった。指導性の項目は、技術の習得度や理解度に比べて低値であった。オーバーハンドパスやアンダーハンドパスといった基本的な技術は、もともと習得度が高かったため指導性はほぼ「3」付近に留まったと考えられるが、その他の項目については「3」を大きく下回っており、教えることが難しいと感じていると判断できる。これは、技術の理解度に加えてこれまでバレーボールを指導した経験がないことに起因すると考えられる。学校教育において教師が備えている高度なスキルとは、生徒のつまずきを発見し、指導することができることである。また、つまずきを発見するためには、技術的ポイントの知識が必要である。したがって、講義内では、技術面の理解を促すとともに小グループで教師役を決めて指導する機会を設け、指導の実践力を高めることも重要になると考えられる。

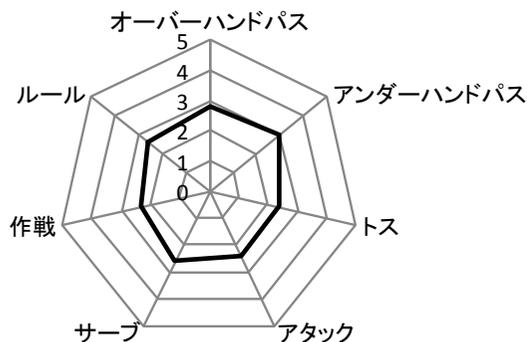


図 5. バレーボールの技術の指導性

## 5) 学習者の目標

学習者自身の設定する目標内容の回答割合は、「技術の向上」が 55.6%、「知識の習得」が 16.7%、「指導性の向上」が 22.2%、「授業を楽しむ」が 5.6%、「その他」が 16.7%であり、バレーボールの技術の向上を目標にあげる学習者が非常に多かった。技術の向上は、生徒への示範のため重要な課題ではあるが、学習過程を紐解くと「知る」、「分かる」、「できる」、「教える」の順で進むことから、技術的ポイントについて「知る」、「分かる」を含む「知識の習得」について目標を設定することは生徒のつまずきを発見・指導する上で重要であると考えられる。しかしながら、教職課程にいる学生において、そのような観点で授業に臨む生徒は少なかった。ただし、学習者の目標において「技術の向上」のためには「知識の習得」も含まれている可能性も否定できない。

## 4 まとめ

本調査において、保健体育教師を志望する受講生を対象に、「バレーボール」についての意識、技術の習得度、理解度および指導性の実態を調査した。その結果は、学習者はバレーボールを肯定的に捉えており、教育現場でバレーボールを教えることについても前向きであった。「技術の理解度」や「技術の指導性」については、体育教師を目指す学習者に重要な要素であることから、講義内で技術やその指導についてのポイントを丁寧に解説することに加えて、学習者がその内容を復習するようためにレポートなどを課し、知識の定着を図る必要があると考えられた。「技術の習得度」、「技術の理解度」において、特に「作戦を立てる」が他の項目よりも身につけていないことが明らかとなった。多くの大学で開講されているバレーボールのシラバス内の授業計画を見ると、15回講義の前半がオーバーハンドパスやアンダーハンドパスなどの基本技術の習得に時間が充てられており、作戦やルール、フォーメーションなどについては授業後半に計画されていることがほとんどである。しかし、中学校学習指導要領（文部科学省、2017）において、ネット型球技の指導に際しては『仲間と連携した動きによって空いている場所を攻撃したり、空いている場所を作り出して攻撃したり、その攻撃に対応して守ることを中心に自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦を立てて、ボールや用具の操作とボールを持たないときの動きに着目させ、学習に取り組ませることが大切である』とされている。したがって、保健体育教師を目指す学習者にとって基本技術はもちろんのことながら、攻撃・守備フォーメーションを含め作戦の立て方が指導できるようになる必要がある。この点を解決するためには、教職課程を持つ大学において講義前半からバレーボールの作戦やルール、フォーメーションについての知識を与えることから始め、その後の講義で展開される試合で作戦を考える機会を増加させることが重要かもしれない。

## 【参考文献】

- 伊藤政男、浦井孝夫、久保田洋一、金子今朝秋、加納実、廣瀬仲良（2002）スポーツ・体育系大学の運動実技カリキュラムに関する研究（中・高等学校における運動実技の履修実態を踏まえて）．順天堂大学スポーツ健康科学研究 6：14-20.
- 稲垣良介（2011）大学生に対する球技Ⅱ（バレーボール）授業に関する一考察 ―主に授業前と授業後の比較から―．福井大学教育実践研究 36：12-22.
- 勝本誠、小川倫子（2002）中学校体育における「バレーボール」教材の研究（1）：ワンバウンドパスゲームの試み．茨城大学教育実践研究 21：251-264
- 高橋健夫（1994）ゲームの授業．体育科教育別冊 42（2）：12-18.
- 西松秀樹（2005）教師効力感と不安に関する研究、滋賀大学教育学部紀要 55：31-38.
- 芳賀修一（2010）ファウストボール「新しいボールゲームの授業づくり」高橋健夫，立木正，岡出美則，鈴木聡（編著）体育科教育別冊 58(3)：106-111.
- 文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説、保健体育編